武蔵野日曜聖書講筵（最後の集会）

まことのキリスト者
――ローマ書９・19～33――

１９９６年７月14日
小池辰雄

山路越えて　選びの民　残りの者　圧倒されてキリストに降参　キリストの関わり「優子ちゃん」藤井武先生　まことのキリスト者　福音を伝える使命　まだ言い足りないんだけれどもしょうがない　祈り

【ロマ９】

19 然らば汝あるいは我に言わん『神なんぞなお人を咎め給うか、誰かその御定に悖る者あらん』 20 ああ人よ、なんじ誰なれば神に言い逆うか、造られしもの、造りたる者に対いて『なんじ何ぞ我を斯く造りし』と言うべきか。 21 陶工は同じ土塊をもて此を貴きに用うる器とし、彼を賤しきに用うる器とするの権なからんや。 22 もし神、怒をあらわし権力を示さんと思しつつも、なお大なる寛容をもて、滅亡に備れる怒の器を忍び、 23 また光栄のために預じめ備え給いし憐憫の器に対いて、その栄光の富を示さんと為給いしならば如何に。 24 この憐憫の器は我等にしてユダヤ人の中よりのみならず、異邦人の中よりも召し給いしものなり。 25 ホゼヤの書に『我わが民たらざる者を我が民と呼び、愛せられざる者を愛せらるる者と呼ばん、 26 「なんじら我が民にあらず」と言いし処にて、彼らは活ける神の子と呼ばるべし』と宣給える如し。 27 イザヤもイスラエルに就きて叫べり『イスラエルの子孫の数は海の砂のごとくなりとも救わるるは、ただ残りの者のみならん。 28 主、地の上に御言を成し了え、これを遂げ、これを速かに為給わん』 29 また『万軍の主、われらに裔を遺し給わずば、我等ソドムの如くになり、ゴモラと等しかりしならん』とイザヤの預言せしが如し。 30 然らば何をか言わん、義を追求めざりし異邦人は義を得たり、即ち信仰による義なり。 31 イスラエルは義の律法を追求めたれど、その律法に到らざりき。 32 何の故か、かれらは信仰によらず、行為によりて追求めたる故なり。彼らは躓く石に躓きたり。 33 録して『視よ、われ躓く石、礙ぐる岩をシオンに置く、之に依頼む者は辱しめられじ』とあるが如し。

●山路越えて

讃美歌の「山路越えて」を特に選んだのは、皆さんはこの夏にはいろいろな所にいらっしゃるでしょうから、その皆さんの夏の生活の一般的な気持ちで、「山路越えて」を歌っていただいたわけです。今日は7月14日ですが、どういう日かというと、内村先生も藤井先生も１９３０年に、内村先生は春（3月28日）、藤井先生は正に7月14日天界に行かれた。

藤井武先生は駒沢新町におられたわけですが、あの家は後で第二次戦争の時に焼夷弾にあって全部焼けてしまって、まことに残念なことでした。私は水戸の高等学校から東大に来て、あの時は3月16日だったと思いますが、雪が降っていた。その時に初めて藤井先生のお宅をお訪ねした。藤井先生は、帰りに『聖書の結婚観』という先生の著書を私にくださった。そういうようなわけで、藤井先生は私の信仰の恩師です。その前に、藤井先生は私の長兄の小池政美を非常に愛してくださって、

「小池君の兄さんは一万人に一人いるかいないかというような人だった。彼の死は本当に残念でしょうがない」

と言われた。兄を非常に惜しまれた。そのことは私も非常に印象深く先生の言葉を覚えています。

藤井先生は詩人的な方で、『羔の婚姻』という詩を書いておられたが、これは未完成で終わってしまって、非常に残念です。「羔」とはもちろんキリストのことです。また、藤井先生は非常にダンテが好きで、集会の後で、我々数人の男性諸君と一緒に野原を散歩してくださって、そこでダンテやミルトンの話を座談のようにして話してくださった。そういうことを覚えています。今日は私にとっては忘れることのできないそういう記念日なんです。１９３０年の7月14日です。今はもう１９９６年だから、随分昔ですね。

●選びの民

今日は、ローマ書9章19節からです。

19 然らば汝あるいは我に言わん『神なんぞなお人を咎め給うか、誰かその御定に悖る者あらん』 20 ああ人よ、なんじ誰なれば神に言い逆うか、造られしもの、造りたる者に対いて『なんじ何ぞ我を斯く造りし』と言うべきか。 21 陶工は同じ土塊をもて此を貴きに用うる器とし、彼を賤しきに用うる器とするの権なからんや。 22 もし神、怒をあらわし権力を示さんと思しつつも、なお大なる寛容をもて、滅亡に備れる怒の器を忍び、 23 また光栄のために預じめ備え給いし憐憫の器に対いて、その栄光の富を示さんと為給いしならば如何に。 24 この憐憫の器は我等にしてユダヤ人の中よ

「怒の器」というのは、神さまの怒の器ということです。「しょうがないやつだ」と神さまに言われるような、そういう器です。

りのみならず、異邦人の中よりも召し給いしものなり。

ユダヤ人は「自分たちは神の選民だ」と言って威張っているわけです。ところが、神の本当の選民というものは、ユダヤ人であろうとギリシヤ人であろうと異邦人であろうと、どこにでもいるわけで、ユダヤ人が自分だけを選びの器だと思うのはとんでもない間違いだと、パウロは言おうとしているわけです。

生まれつきの血統のことを「肉によりて」という。ユダヤ系の血筋をしょっているから、アブラハムの血筋をしょっているから「俺たちは選びの民だ」なんて、そういうことは言えない。「選び」というのは、神さまはどこからでも選びだしたもうので、血統ではないんだということです。さすがは、パウロはしっかりとした使徒です。パウロは生粋（きっすい）のユダヤ人ですけれども。もっとも彼はギリシヤの教養も非常にもっている両刀使いみたいな人で、非常に豊かな人です。

25 **ホゼヤの書に『我わが民たらざる者を我が民と呼び、愛せられざる者を愛せらるる者と呼ばん、**

神さまの選びというのは、そういう血統的な民だとか選びとかいうものではない。これは正にパウロが言うとおりの福音の世界です。

26 **「なんじら我が民にあらず」と言いし処にて、彼らは活ける神の子と呼ばるべし』と宣給（のたま）える如し。**

そう書いてあるではないかと。「良きサマリヤ人」という話を――サマリヤはユダヤと喧嘩していたのだけれども、サマリヤ人の中にも大事な人がいるということを――キリストが或るところで仰った。そんな血筋でもって決まるわけではない。世界中どこの人であろうとも神さまに捕まったら、それが「選びの人」なんです。

●残りの者

27 **イザヤもイスラエルに就（つ）きて叫べり『イスラエルの子孫の数は海の砂のごとくなりとも救わるるは、ただ残りの者のみならん。**

この「残りの者」というのは面白い。余計だと思って残されたような、そういったところに実は大事な人が残されている。それで「残りの者」という。

私は内村鑑三のいわゆる無教会の流れに育ったわけですけれども、もう一人、九州に手島郁郎という人がいて、手島君と私は熊本の垂玉（たるたま）温泉で一緒に集会をした。その時に、ゆっくりと二人で語り合ったことがある。

「無教会のご連中は自分たちこそ正統であるなんて思っているけれども、とんでもない。我々はそういったパリサイ的根性は嫌いだ。はじき出されたような者が実は神さまに逆に捕らえられて使われるんだ」

と。そういうわけで、このホゼヤ書にある通りではないかということです。

「愛せられざる者を愛せらるる者と呼ばん」

とある。血統的に愛された者が決して霊的な跡取りというわけにはいかない。本当に霊的な跡取りというのは、どこからでも神さまはつかみだすので、肉的に血筋によって

「俺たちはアブラハムの裔（すえ）だ」

と威張っていたって、そんなものは反（かえ）ってだめなんだ、ということをパウロが言おうとしている。「残りの者」が実は大事なんだ。

自分で言ってはおかしいけれども、私は無教会の残り者です。無教会の手島君もそうだ。ところが、手島君は今から20年ばかり前に逝ってしまった。彼は

「僕はちょっと食事を間違えた」

と言っていた。「食事を間違えた」というのは、あまり御飯を食べないで酒ばっかり飲んでいた。それで彼は肝硬変になって生命を失ってしまった。彼が身体をこわしてしまって、僕が見舞いに行って、いよいよ最後にさよならをする時に、もうこれがお終いだと彼も思ったらしい。それで、

「元日に私は話すことになっているが、私は元日までもちそうもないから、小池さん、私の代わりにやってください」

と言った。実際そうなってしまった。手島さんの手紙は随分たくさんあるので、私は大事にとってあります。とにかく、気合は非常に彼とは合っていた。いわゆる無教会の流れはインテリ・クリスチャンです。そのインテリが鼻についているようなのは、僕も嫌いなんだ。だから、まことのキリスト者は本当の「野人」である。どんなに教養があろうと、福音の世界は本質的には野人でなければだめなんです。教養が鼻にかかっているようなクリスチャンはだめなんだ。

●圧倒されてキリストに降参

恵みというのは何かをいただくことではない。キリストが恵みの主体なんです。神の力、光、生命、それがみんな恵みの内容です。その恵みに圧倒される。キリストという恵みの主体に圧倒される。福音書を読んで、キリストに降参するまでは本当は読めませんよ。分かるの分からないのと、そんなことではない。イエス・キリストというひとに、

「全く参った。これは大変な方だ」

と言って降参すると、このキリストの世界に入れる。そういう読み方を普通のクリスチャンはやってないね。キリストのした事、言った事をただ理解しようとする。理解の世界ではないんです。キリストは神の現象体だから、それに圧倒されて

「いや、大変だ。参りました！」

と、キリストに降参するとこの福音書の世界に、キリストの中に入るんです。降参すると、キリストの中に入る。キリストと一つにならなければ本当のクリスチャンではない。

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、本質的にはそれが告白できなければだめなんです。「信仰」なんて、信じ仰いでいたってだめです。むしろ、神交わり、「神交」と言ったらいい。神の出店みたいなキリスト、そういった神の子キリストとの交わり、魂の交わりです。自分をキリストの中に投げ入れるんです。キリストの中に投げ入れてキリストと一つになる。そうしたら、力が来て、ありがたくて、光がきて、生命がきて、しょうがない。だから、

「私は信仰なんかありません。自分の信仰なんて、そんなものはありません。ただキリストに圧倒されているだけです」

というのが私の告白です。聖書をどれだけ読んだ、参考書をどれだけ読んだと、そんなことではない。とにかく、キリストに圧倒されて、キリストと一つにされてしまって、そして、キリストの生命がきてしまったから、もぅもの凄いから、ありがたくてしょうがない、力が来てしょうがない。死んでも死なない。本当の福音の世界はそういう世界です。パウロさんは本当にそういうような信徒です。

「我が生くるはキリストなり」

という。

「自分の生きているのはキリストだ、キリストによるんだ」

と。そういうもの凄いところに入れられてから、パウロは、

「もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。」（ロマ９・３）

「キリストに棄てられても構わない。それくらい救われたんだから、何とかして同胞を救ってやりたい」

と言う。これが本当のキリスト愛です。「呪われても」という言葉はギリシヤ語で「アナテマ」という。これはパウロのアナテマ魂（呪われ魂）と言いたい。

「残りの者」というのは別な言葉でいうと「選びの者」なんです。あなた方一人一人も選ばれている。選ばれているのは自分たちが価値があるからではない。神さまは人間の判断と違った意味で選びたもう。選ばれた者は伝道する使命がある。存在をもって、生活をもって伝道する。生活そのものが伝道であるわけです。だから、あなた方一人一人はみんな伝道者なんです。どんな人にぶつかっても、

「ああ、この人には福音を伝えてやろう」

と思ったら、

「まぁ、福音書というものを読んでごらんなさい。大変なひとです、キリストというひとは」

と、遠慮なく語るといい。

●キリストの関わり

キリストに圧倒される。こういう読み方がなかなかできないんだ。「キリストは神さまの子だから」なんて言って、ただ客観的に読んでいる。客観的に読んだってだめなんです、自分との関わりで読まないと。

「関わり」といえば、私が小学校の5、6年の時の国語の先生が、

「夏休みの面白かったことを書きなさい。自分との関わりにおいて書きなさい」

と、そういう角度から言われた。さすがは、あの先生はそういうところの素晴らしい先生だったね。ものは客観的に見たってだめなんです。

福音の世界は特に関わりです。「神―キリスト―我」というこの縦の関係、この関わりです。キリストはペテロの足を洗おうとした時、ペテロが、

「私の足を洗っていただくなんて、もったいない」

と断ったら、

「私がお前の足を洗わなかったら、お前との関わりはないぞ」

と言われた。キリストの関わりというのは、我々の罪を贖ってくださるという関わりなんだ。キリストは、

「私がお前の足を洗ってやるのはそういう関わりなんだ」

と言われた。だから、ペテロは参ってしまったわけだ。我々は「キリストに洗われる」という関わりにおいて贖われた。贖いの代償は何かというと、キリストの生命なんだ。

「私の生命をお前にやるぞ」

と。我々一人一人が霊的な生命をキリストから頂いているわけです。

十字架の贖罪です。我々の罪のためにキリスト自身が裁かれた。我々の代わりにキリストが裁かれて、十字架に架かった。そして今度は復活して、その復活の生命をくださる。だから、十字架と復活は恵みなんです。恵みの土台が十字架で、復活はその恵みのでき上がりです。我々に甦り（よみがえ）の生命をくださる。生まれつきの自分に死に、新しき我に生きる。それが十字架と復活です。

●「優子ちゃん」

だから、我々は、死んでも死なないキリストの永遠の生命をいただいているわけです。もう、死が死でなくなる。それはただ一つの門なんです。その門を通って次の世界に行って、パウロがコリント書で言っているように、霊的生命を我々は頂くわけです。相対的な死なんていうものは問題でなくなってしまう。霊生に生きることなんです。

優子ちゃんという子供がいた。いい子だったけれども、今から22年前に2歳くらいで仆れてしまった。そのお墓参りに私はこないだ行ってきた。優子ちゃんの前で讃美歌を歌ってやった。『優子ちゃん』という詩を、私の著作集の第二巻（『芸術のたましい』１９７６年刊）

に書いてありますから、読んでみてください。彼女は向こうへ行ってから、天的生命を頂いてもう大きくなっています。そういう不思議なお墓参りをしてきた。

●藤井武先生

藤井武（１８８８～１９３０）という方は加賀百万石の城下町の金沢の生まれの人です。お父さんは軍人だけれども、藤井先生自身は小さい時に非常に臆病者だった。けれども、自然を非常に愛する気持ちをもっていた。卯辰（うたつ）山という山があって、そこで先生は自然に親しんで慰められた。中学を卒業して旧制一高に入学したのは１９０４年(明治37年)だった。私が生まれた年だね。日露戦争の最中だ。先生は非常にロマンチックな精神的な憧れをもっていて、何か寂しくてしょうがない、何か自分を本当に慰め力をつけてくれるものがないかと。それで、カーライル、テニソン、トルストイ等を読んでみたけれども、どうもだめだ。

旧制一高に哲学とドイツ語の名物教授の岩元禎先生がいて、ダンテ、プラトン、スピノーザを教わった。岩元先生というのは面白い先生で、学生が少し間の抜けたような質問をすると、「馬鹿！」と大喝して答えなかったそうです。しかし、藤井先生は聖書を読んで初めて、ああここに自分の本当の求めているものがあるということに気がついた。それを導いてくれたのは、むしろヒルティーの『幸福論（グリュック）』だった。それに感激して福音の世界に入った。もちろん、藤井先生の先生は内村鑑三（１８６１～１９３０）です。

それから、藤井先生は独立して自宅で集会を開いた。そこへ私は大学に入った時に最初の日曜日に藤井先生の所に行って、後5年間、先生が仆れるまで一回も欠席しないで参会しました。

先生はもともと山形で官吏をしていたのが、いわゆる官界が感心できないので自分は辞めたといって、内村先生の所にきて内村先生の助手になって、それで福音の世界に自分は生きようということで、職業を捨ててかかった。そういう方です。

十字架ということが――そのころは聖霊ということはあまり言わない――非常にはっきりしてきた。『舊約と新約』という雑誌を書き出した。『羔の婚姻』という詩は素晴らしい詩だけれども、惜しいことをしました。もう2年、先生は生きていたら完成していたと思う。藤井先生は自分の奥さんが先に仆れていなくなってしまった。けれども、天界の藤井先生の奥さんは祈りの世界で藤井先生を助けたというようなことも言えるわけです。

藤井先生の所に行っていた私の家内と――その時は伊藤順子と言ったんですが――それが機縁になって結婚したようなわけです。

藤井先生と同じ頃にいたもう一人の有名な方は賀川豊彦（１８８８～１９６０）です。賀川さんはちょうど先生と同じくらいの歳で、不思議なものだ。

●まことのキリスト者

ローマ書9章に戻ります。パウロの

「同胞のためにはキリストに捨てられても」

というのをアナテマ魂（呪われ魂）と言うんです。

「キリストに捨てられても彼らの救われんことを」

というパウロの気持ちは非常に激しい表現です。

16 **然れば欲する者にも由らず、走る者にも由らず、ただ憐(あわれ)みたもう神に由るなり。**

あなた方はみんな神さまに憐みられている人です。「憐まれている」ということは、

「選ばれている」

ということと同じことです。皆さん一人一人はとにかく、神さまに捕まったところの人です。だから、逃げるわけにいかない。そして、

「神の圧倒」

は恵みの圧倒だから、必ず力が来る。聖書を読んでいて、力が来なかったら、本当は読んでいない。読んでいて、

「意味がどうだ」

ではない。その内容に圧倒されなければだめなんだ。言葉の奥から来ているところのキリストの生命、光、これに圧倒される。だから、聖書の読み方というのは「意味」ではない。力なんだ。パウロも

「福音は言葉に非ず、力なり」

と言っている。聖書を、ことに新約聖書を読んで、そのキリストの力がそこからやってくるようなことにならなくてはだめです。パウロの書翰を通してもそうです。それで初めて読んでいるということになる。そうでなければ読んでいることにならない。

愛の書なんだね、「聖書」なんて言わなくたっていい。

「圧倒的な愛の書」

なんだ。「愛書」と言ったっていい。聖書なんていうと、もったいぶってしまうからね。神の愛の書、「神愛の書」なんだ。

まぁ、藤井先生が天界で喜んでくださっているでしょう。いわゆる聖書研究会なんてのはだめなんだ。皆さんはそんなことをしておられないけれども。

よく、幸せだの幸福だのというけれども、聖書はいわゆる幸福でも、いわゆる幸せでもない。

「幸福(さいわい)なるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり。」（マタイ5・3）

ここに「幸福」と書いてあるけれども、これは本当は「恵福」と書かなくてはだめです。「心が貧しい」というのは

「自分を何ものともしない」

ということです。「無者」なんです。

「恵福（さいわい）なるかな、無者よ、キリストはその人のものだ」

ということです。天国の主体はキリストです。天国とは神さまの愛が支配しているところ。即ち、神の愛が支配している主体はキリストですから、

「天国はその人のものなり」

とは、

「キリストはその人のものなり」

ということです。そういうように読んでくださいよ。

「恵福なるかな、自分を何者ともしない者、キリストはその人のものである」

と。キリストと一つになっているところが天国なんです。地上で普通の生活で天国人でなければだめなんです。運命環境がどうあろうと、そんなことに支配されない。

「どういうことでも結構です」

と言って、それに感謝する。

アッシジのフランチェスコがそういう人でした。私はあのフランチェスコの伝記を読んで、

「いや、素晴らしいやつだなぁ」

と思った。彼は何でも感謝してしまう。どんな境遇におかれても、キリストの聖名をたたえる。神さまの聖名を讃える。運命環境を自分が完全に支配している。そういう境地にならなければね。そういうのが真のキリスト者なんです。運命環境に支配されない。キリストに圧倒されている者、これがまことのキリスト者です。あなた方一人一人がそうです。

「武蔵野幕屋の連中はどこか違うなぁ」

という。違うよ、はっきり。カトリックであろうと、プロテスタントであろうと、そんなことはどうでもいい。宗派的な気持ちがあって区別しているうちはだめなんです。何であろうといい。そういうことで、私はあのフランチェスコという人の伝記を読んで、これは本ものだと思った。

●福音を伝える使命

内村先生はあの頃は「信仰のみ」と、藤井先生も「信仰のみ」と言っていたね。やはりあの頃はまだ、あるいは無教会の信仰は多少、観念的なところがあった。信仰がサムシングになっている。

「自分の信仰はどうだ」

なんて、そんなことを言っているうちはだめなんだ。

「私は信仰なんかありません。ただキリストに圧倒されているだけです。自分の信仰なんか、そんなものはありません。圧倒されて、私は無者です」

と。それでいい。何ものもない。

「恵福なるかな、霊の貧しき者」

とはそのことです。霊が貧しい。「心」と訳したのは間違いで、これは「霊」です。「プニューマ」ですから。自分を何ものともしない者、霊の貧しい者、そこに本当の聖霊がくる。だから、ロマ書8章で、

「聖霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」（ロマ８・９）

とパウロが言っている。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定められることなし。キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんぢじ罪と死との法より解放したればなり。」（ロマ８・１～２）

これははっきりした言葉だね。キリスト・イエスの中で生きている生命の御霊の法は、滅びない生命の御霊の法則は、なんじを罪と死との法則から解き放した。だから、パウロは9章で、

「もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。」（ロマ９・３）

「我みずから呪われ魂（アナテマ）になってキリストに棄てられても望むところだ」という。

「キリストに棄てられても」

という言い方はずいぶん強い言い方だ。何とかして助けてやりたいということです。皆さんも、そういうパウロ的な気持ちで伝道してください。救われたということは伝道の義務があるんです。人に福音を伝える使命がある。そうでないと、救が腐ってしまう。

「来たりて視よ。聖書はもの凄い本だ。教えではない。キリスト教ではない。道なんだ。キリスト道だ。だから、自分で歩かなければ分からない。歩いて初めて分かる。聖書に書いてあることを生活して初めて分かる。読んで分かったってだめなんだ」

と。そういうわけです。

活きが違ってくるんだよ。福音を本当に生きている人と福音のない人とは活きがちがう。お魚の活きみたいなものだ。そうすると、何を読んでも、聖書の光で読めるんです。御霊の光で読むから作者以上のことを把んでしまう。つまらない本を面白くしてしまう。

●まだ言い足りないんだけれどもしょうがない

そういう点ではダンテの『神曲』は大したもんだ。私は『神曲』が一番凄いと思っている。ユゴーの『レ・ミゼラブル』という小説も大した小説だな。ユゴーの『レ・ミゼラブル』とダンテの『神曲』。向こうの文学で私は一番素晴らしいと思うのはこの二つです。素晴ら

しい文学は哲学よりも真理の内容は凄い。哲学は一種の理屈だけど、文学は理屈ではないから。

それから、素晴らしいのは音楽です。バッハだとか、ベートーヴェンやシューベルトみたいな、ああいう音楽。『第九シンフォニー』なんて素晴らしい。あれは『第十』まで作りたかったらしいね。それは、聞くときにはベートーヴェンの気持ちにならなければ。バッハの気持ちにならなければ。シューベルトの気持ちにならなければね。そういう意味で、作者と一つになって聞くような、そういう聞き方をしている人は少ない。そのためには作者の伝記を、その生涯をちゃんと読んでないとね。ベートーヴェンなんかは、ドナウ河にいっぺん投身して死のうと思ったくらいな人だから。音楽家が耳が聞こえないというのは、ある意味では致命傷だけれども、ベートーヴェンは今度は霊的な耳で聞き出したから、あんな素晴らしいシンフォニーができた。

日本でも盲で素晴らしい人がいたね。塙保己一（はなわ）です。これは素晴らしい人だね。とにかく、第一流のものを相手にしないさいよ。その他のものは要らんですから。いわゆる聖書の註解書よりか、そういうものの方が本当の聖書の助けになる。

そういう意味で、聖書というのは大変だよ、驚くべき本だ。もったいぶる必要はひとつもない。パウロでも、ヨハネでも、ペテロでも、圧倒されてこれを書いているんだからね、頭で書いているのではないんだ。キリストに捕まってしまって、圧倒されて書いている。これは愛の生命の本です。「聖書（神聖なる書）」なんていって、ただもったいぶったってだめなんだ。

今日は藤井先生を思いながら、皆さんと前期の最後の集会をこのように、ローマ書の大事なところを機会にして学ぶことができて感謝であります。なんだか、まだ言い足りないんだけれどもしょうがない。

●祈り

主さま、あなたの御霊と御言によって、私たちは今日、特にローマ書を通してあなたの生命に与かり、ありがとうございました。我々は聖書なくしては活きていくことができません。どうぞ、そのことを日々の生活を通していよいよ実現していくことができますように願い奉ります。私たち自身が、一人一人がその聖書の続編として、あなたの告白を生活をもってしていくことができますことを感謝いたします。どうぞ、そのようにして、この夏休みは、それぞれ一人一人がその人でなければできないことをさせてください。そして、あなたのご栄光が現れますように願い奉ります。私たちが活きるのはあなたのご栄光のためです。心からの感謝と讃美と祈りを兄弟姉妹たちの全身にあるそれとともに聖名にあって捧げ奉る。アーメン。